相馬御風随筆「汽車に寄する思」

初出：相馬御風一人雑誌「野を歩む者」第 61 号（昭和 17.6.30 発行）
所収：『雪中佳日』（初版　昭和 18.2.10 発行　　再版 昭和 22.4.15 発行）
※以下、初出を底本に、読みやすく編集しました。（平成 28 年 1 月 22 日　文化振興課）

私の住んでいる家は、田舎町のどちらかというと静かな部分に属するところにあるが、停車場が近いために汽車の響きや汽笛の音がずいぶん騒々しい。といって少なくとも三百年以上先祖代々が生き且つ死んできたこの宅地を離れるということは、よくよくの事情のない限り私には忍び難い。そればかりでなく、騒々しい汽車の響きも、慣れるとさほど苦にならないものである。

そういえば、停車場よりもっと近いところまで日本海の波が打ち寄せている。時には宅地内まで大浪の打ちあげることさえある。しかし、その方はいかにすさまじくても一向平気である。この方は汽車とちがって、怖るべき危険を伴っているのであるが、生まれてはじめて物音が聞こえるようになってから聞き慣れてきたために、どんなすさまじい波音も気にならない。慣れるということは妙なものだとつくづく思う。

それにしても、静かな夜更けに独りでじっと聞いていると、波の音にも限りない思いが寄せられるとともに、汽車の音にも無量の思いが寄せられる。

そしてそれは深く雪の積もった冬の夜更けなどには格別である。

ふか雪にうもれてを聞く波の音よるはこの世のものとしもなし

これは去年の冬の夜更けに詠んだ歌であるが、まったくそのような時にはいわゆる「世外」の感往々にしてそぞろなるものがある。

それに比べると、汽車の音はそうした場合殊に世にかかわる思いを深からしめる。とりわけすさまじい吹雪の音の底から響いてくる除雪機関車の、あのさびしい汽笛の叫びの如きは寒風を冒（おか）し雪と闘いつつある人々の身の上にいやが上にも思いを寄せさせずにおかない。

私たちの町に鉄道の通じたのは、今から三十数年前であるが、荒れ狂う日本海岸の断崖つづき十余里というようなこんな嶮岨（けんそ）な土地に、よくもよくも鉄道が通じたものだと私たちはむしろ驚嘆せずにいられなかった。

そのために費やされた資材や費用はとにかく、そのためにいかに多くの人々の、いかに大きな心身の労苦が費されたであろうかを思う時、私たちは「道を開く」「道をつくる」ということの重大性をさまざまな点から考えずにいられないのである。

しかも、道はただひらかれただけでは、いつしか荒廃する。それを防ぐためには常に道を護る人の労力が費されなければならぬ。又その道を進む機関の安全を確保するためにも同様である。

この「道をひらくこと」、「道を護ること」そして「道を進むこと」、この三つのことを深く考えることは、ひとり鉄道についての大問題だけにとどまるものではない。

汽車に乗り歩く人は多い。又貨物を鉄道に托して送る人は多い。しかしそれら無数の人々のうちの幾人かが果たしてよく以上の三つのことに思いを致しているであろうか。

おもえば、私たちが汽車に乗って安全にらくらくと遠方へ行くことが出来るということだけでも決してそれはおろそかに思ってはならないことである。

汽車に乗り歩く多くの人々の中にはボーイさんにチップをやる人がこれまで多かったが、誰かよく風雪の夜、炎熱の昼「道を護る」ために日夜働きつづけている人々に感謝を寄せたであろうか。又誰か汽車を安全に動かし進めるために日夜働きつづけている人々に「ありがとう！」を云わずにいられなかったであろうか。

「道」はひらきつくる人のみによって全きを得ない。常にそれを護る人があらねばならぬ。又常にそれを進む人があらねばならぬ。

しかも道をひらきつくる人必ずしも道を護る人ではない。又護る人は進む人と同じではない。

私たちはこのことを深く考えると共に、道を行くべく常に以上三者の存在に深く思いをいたさねばならぬ。

日一日と冬が深まっていく。やがては例年の通り風雪の日が多くなり、寒さが夜々に加わっていくであろう。

家の周囲が数尺もの深い雪にとりかこまれ、往き来の人の足音も聞こえなくなる日も、そう遠くないであろう。

そうした静けさの中に独坐して更けゆく夜半に、私はいかに深い思いを寄せつつ汽車の響きや汽笛を聞くことであろう。

東京行の急行列車の過ぎるのは午後十一時である。その響きは私に二十三年一度も行ったことのない東京をおもわせる。又漫然と旅を思わせ、旅する人々の心を思わせる。

だが、それら以上に、私は汽車の道を護る人々と、汽車の道に汽車を進ませる人々の労苦について深く考えさせられる。